

浩浩洞の人々

——清沢満之と曾我量深——

松原祐善

昭和四十六年九月十九日、私に表記の題目が与えられ、私は特に曾我先生の追憶の意を含めてNHKで全国放送をした。今回、本誌の編集部より当時放送の原稿を要求されたので、そのまま掲載することにした。但し放送時間は三十分の制限があったため、この原稿の全文を読むことは許されなかったため、この原稿の所々を省略して当時放送したことをご諒承いただきたい。

一

元大谷大学長であられた曾我量深先生は去年六月二十日に九十六歳を以てお亡くなりになりました。先生は明治八年九月五日に新潟県蒲原郡味方村(富岡量導三男)にお生まれになり、明治三十二年真宗大学本科を卒業して同研究院に入學のとき、新潟県見附市浄恩寺曾我惠南の養子となられて曾我姓を名のられたのであります。かくて先生は明治・大正・昭和の三代にわたり、近代日本の仏者として、稀有の宗教思想家として、長いその生涯を聞法・学道の一筋道に捧げられたのであります。特に浄土真宗の真髓を身に体せられ、その遺された数多い著述には独創的かつねに新鮮であり、個性の豊かな深遠な思想がもられています。その学問の深さ、その識見の高いことは他人の追隨を許さない

ものがあります。否、むしろ今日の多くの仏教学の研究書、学問書と全く類例を異にし、更に異質のものであることが感ぜられます。經典を語るにしても、単なる古典としての解説に終るのでなく、經典そのものの真理、その久遠の響色、その靈的生命の新しい息吹を以て眠れる現代人を覚醒せんと努力されたのであります。而してその晩年は日本の全国有縁の各地を巡回して、最後病床に臥せられるまで、伝道教化のために身命を惜しまれることがなかったのであります。今日先生の肉身はなくなりましたが、その法身は、この娑婆界の生死罪濁の苦悩の現実を離れたまわず、つねに煩惱の稠林に廻入して、説法獅子吼し、還相廻向の大活動をなされていることを私は疑うことができません。それが先生の死生を一貫する本願でありました。

さて先生の長い生涯を通して最も重大な事件は、青年時に清沢満之との邂逅・値遇を得られたということであります。特に晩年に及んで清沢先生を思慕さること切なるものがありました。昭和四十年十月曾我先生が九十歳を迎えられた頌寿記念の講演会に、「如来あつての信か、信あつての如来か」という講題を掲げられ、この題目は若き日に清沢先生から課題として問われた問題であることを仰せられて、「これは一日でも忘れることのできない清沢先生」と語り出されているのであります。

曾我先生の年譜をみますと、明治三十六年三月、清沢満之の浩浩洞に入洞とあります。そして、それは先生の二十八歳のときであります。明治三十六年三月といえば、清沢満之はすでにその前年の明治三十五年十一月には真宗大学の学監(学長)を辞して東京を離れ、自坊の愛知県碧南市の西方寺へかえり、病身を養われながら、引き続き雑誌『精神界』の月々の原稿に筆をとられていたのであります。そして明治三十六年六月六日俄かに病早まり、喀血して清沢先生は四十一歳の短い生涯でこの世を去られたのであります。してみれば曾我先生の浩浩洞入洞の時は、師の清沢満之は東京の地を去って愛知県三河の大浜にあり、その三ヶ月後には亡くなって居られるのであります。

ここで私は清沢満之と曾我量深との値遇について曾我先生自身の表白をききたいと思ひます。明治四十二年六月の

『精神界』に発表されている「自己を辯護せざる人」として清沢満之を偲ばれている文章があります。ちょうど清沢満之滅後七年にあたり、先生三十四歳のときの筆であります。

「今や現に霊存し給へる先師を念じつつ、静に遠く七年の昔を回想する時、奇なる哉、御生前には死せるが如く静寂にて在ましたる先生は、滅後に至りて始めて大なる活動を現じ給ひ、而もその活動は次第に拡大し給ふのである。生は活動であり、死は静寂である、故に人生は奮闘的でなければならぬ、静寂の人は死せる人である、とは世の多くが唱ふる所である。果して然らば先生は御生前には已に死し、死して初めて生き給ひた御方であります。わが先生は僅なる四十一年の休息に依りて、無窮の大奮闘的生活に入り給ひたのである。先生は誠にわが真宗に於ける死後還相の園林遊戲の実現者であらせらるるのである。今や生きて死せる我々は、已に死して正に生ける先生に依りて、生死に関する従来の妄想を一掃せねばならぬこととなったのであります」

とはじめて説き起され、恰も清沢満之の死別後において満之との久遠の値遇ありしことを表白されるようであります。「先生御在世の時、他の門弟の人々（暁鳥敏・多田鼎・佐々木月樵・和田龍造等の直門の方々）が、師と起居を共にし、師の精神主義を讃仰しつつあった時、われは、嗚呼われは果して何処に何事をなしつつある乎。嗚呼われは想へば八年の昔、巢鴨の天地に在りて、筆なる剣を以て先生並に現在の同人を害せんと企てつつあったのであります。嗚呼われは積尊に対する提婆達多也、親鸞聖人に対する山伏辨圓であつたのであります。誠に因縁不可思議である。親鸞聖人の『信順を因とし、疑謗を縁とす』との御言の如く、他の兄弟が信順の順因に依りて先生の室に入りしに對し、私一人は疑謗の逆縁を以て、同一の地位に登りましたことは、一に不思議なる如来大悲の恩寵と感泣することであり、私一人と回顧されています。しかし清沢満之その人の人格には早くより深く心引かるものがありました。清沢先生並びに門弟達の主張する精神主義に對して、あくまでも批判的であり、少からざる抵抗を覚えられ、反抗の筆をとられていたのであります。この先生への反抗から信順への転換は門弟の一人である和田龍造氏（昭和八年一月六日秋）の誘導によ

ることです。大正二年八月の『精神界』に「現実の浄土」と題する、和田龍造君に与ふる書という文章があります。そのなかに

「大兄は小弟の最始の善友にして、又唯一の敵友であった、大兄の言論を始終否定し、大兄を苦境に陥れたること幾度であったか。温厚なる大兄は静かに小弟の剣を受けつつ、遂に我を先師（清沢先生）の会下に導いた。高慢にして師友の如何なる言論にも心服せざる我に、多くの師友を与へたるは偏へに大兄の御恩である」

と感謝しているが、かくして和田龍造氏の導きにより明治三十六年三月の浩浩洞入洞ということになったことが思われます。

しかし師である清沢満之の人格についてはその前年の明治三十五年二月に、東京上野の精養軒にて関東仏教徒の会合があり、偶々二十七歳の曾我量深は中央の清沢先生の机のすぐ前に座席を占めていたというのです。当時清沢先生の精神主義に関して論難甚だ盛んな時でありました。すなわち先生は一場のテーブルスピーチをなされたのであります。

「我々が精神主義を唱へて、諸万の高教誠に感謝の至に堪えぬことでもありますけれども、我々は何等をも主張するのでなく、唯自己の罪惡と無能とを懺悔して、如来の御前にひれ伏すばかりである。要は懺悔の表白に外ならぬ」と仰せられたのであります。

「その森敵なる御面容、今に髣髴として忘ることが出来ぬ。先生の如き論理的なる頭腦を以てせば如何なる巧妙なる辯護も出来たであります。一言の辯護すらなされぬ所、此は正に深く自ら慚愧に堪えざると共に、大に恃む所があるがためでありましょう。我は已に如来に依りて辯護せられ終りたではないかと。此れが恐らくは先生の確信であつたらうと思はれます。私は先生について第一に想い出すのはこの一事である。私は則ち『自己を辯護せざる人』として先生を忘ることが出来ない」

と曾我先生は師の清沢満之について述べられるのであります。

二

私はここで一言、清沢先生について何も御存知ない方のためにごく簡単に清沢満之その人を紹介したいと思います。清沢満之は文久三年尾張藩士徳永永則の長男として名古屋市東区黒門町に生まれられた。そして明治三十六年六月六日に碧南市大浜町西方寺で四十一歳にてその短い生涯を閉ぢられたのであります。その四十一年の靈的奮闘の生涯はその滅後に愈々、その光芒を増し、拡大し、その精神的遺業は近代日本仏教の原点として現代に於て益々多くの人々の思慕を寄するところであります。ここに東京帝国大学在学中より最も親交あり、生涯の友であった沢柳政太郎(京大・東北大総長になられた人)の言葉をかりましょう。

「清沢君と私とは、明治十八年からの知己であります。清沢君はもと御承知の如く徳永と申して大学予備門へは、中途から入学せられた人である。中途から入学することは非常に六ヶ敷きことであるが、今氏が中途で入学したということ丈でも、初から非凡であったことが分る。丁度その級は、大学では非常な秀才ばかり居た級で、岡田良平・一木喜徳郎・早川千吉・林田亀太郎・林権助・内田康哉君等の級である。然るに氏が常にその首席を占めて居たのは、如何にその非凡の才能を有して居たかが察せられる。若し、学者として進まれたら非常な大学者となり、実業家、或は政治家となられたら、氏は必ず天下に知らるる人になられたであらう。

さうして清沢氏は学問ばかりでなく、非常に意志の強固な人であつて、議論には若い時分から屈せぬ所の人であつた。なさうと思ふ事は必ずなす人であつた。殊に私欲に打ち勝ち、修養には早くより心がけて居られた。才気すぐれて居る者は、実行に欠くものであるが、氏は才気すぐれてしかも実行家であつた。要するに学業にすぐれ、意志強固でしかも同情にたけて居られたことは誰でも清沢氏と交つた人は御承知であらうと思ふ。尚ほ一つ私が最

も敬服して居たのは、此如き性質の人にして、寛容の美德を兼ね備へて居られたことである。自分には非常に鋭利であつて、然も他人の欠点をとがめぬ人であつた。私は生れつき傲慢不遜で多くの人を餘り感服せぬ方であるが、独り清沢君のみは、心竊かに服して居た……

私は、ここに一つの疑問を持つて居る。清沢君は、さきに申した如く非凡な人である。この故に、物質的成功や名利等に就いては、若し自分が求むるならば充分予想の出来た人であるのに、全然それをすてて、身を僧界に投ぜられたといふことである。今日、宗教家の家に生れて、自身また宗教に携はるべき因縁關係ある人でも、多く名利の為に俗化してしまふ世の中に、身俗家に生れ乍ら、奮然身を宗教界に投じたるは、実に大なる教訓で、非常な美事であると思ふ。最一つは、君の如き意志の強固を以てして、尚ほ自力によらずして他力の信心を得られたことである。若し自力の宗旨が成り立つものとすれば、即ち君の如き人によって初めて成立つであらう。然るに他力によって安心せられたのは、これ実に人類の弱きことを示したるものにあらざるか。

これを要するに清沢氏の一生は、実に研究すべき一生である云々」（清沢満之全集第八巻・五九六～八頁）と語られています。清沢満之は明治二十年、二十五歳で東京帝国大学文学部哲学科を卒業し、大学院に入学して宗教哲学を専攻されました。かたわら第一高等学校（現在東京大学・教養学部）に仏国史を講じ、井上円了氏の哲学館（現在東洋大学）に哲学の講師として通われ、郷里名古屋市より両親を迎え本郷西片町に一応その居を構えられたのであるが、翌二十一年東本願寺は二十六歳の満之を召して京都尋常中学の校長に任命したのであります。満之はここに最も愛好した学問の道を捨て、満之の言葉を以てすれば東本願寺の恩義に報ぜんためであり、以後身を僧界に投じ宗門教育に挺身されたのであります。その間肺結核に侵されその病身を提げながら健康者以上に奮闘され、四十一年のその靈的生涯を終えられたのであります。

この清沢先生が再度東京にもどられてきたのは、明治三十二年で先生三十七歳のときであります。それは当時浅草

本願寺にありて勉学中の大谷光演句仏上人の招聘と在京の近角常観師等の勧誘によることがいわれます。この頃東本願寺宗務当局（石川舜台師）は清沢満之に対し真宗大学の学監（学長）の就任を要望してきたのであります。これに対し満之は宗政の本拠である京都の地を離れて大学を東京に移転することを第一条件として、これを承諾したのであります。かくて三十三年七月より真宗大学の建築工事が豊島区巢鴨の地にはじめられ、三十四年九月に竣工の予定であったのであります。丁度その頃多田鼎・佐々木月樵・暁烏敏の三人が京都の真宗大学を卒業し、更に勉学を続けるために、東京の清沢満之の膝下にありて研究に従事することを三人が約して満之の許可を得て、明治三十三年九月に東京に上り、本郷森川町に満之と同居してその指導をうくることになったのであります。これが浩浩洞の起りであり、この師弟の共同生活のなかより雑誌『精神界』が生れ、当時の日本の青年達に甚大な思想的影響を与えたのであります。この清沢満之の精神主義運動は師の滅後直門の暁烏敏・多田鼎・佐々木月樵の三羽鳥、それに遅れて入洞した曾我量深を加えて清沢門下の四天王と呼ばれるのであるが、これらの門弟を中心としてひろく全国に拡大されて今日に及んでいるのであるが、そのなかで佐々木月樵師は大正十五年三月六日大谷大学長の現職のまま五十二歳を以て死去、多田鼎師は昭和十二年十二月七日六十二歳にて死亡、暁烏敏師は昭和二十九年八月二十七日七十七歳にて逝去されたが長く九十六歳まで長寿を保ちしかも身心ともに健康にて、今日まで清沢満之直門の最後の一人として曾我量深師がその精神を継承して奮闘活躍されていたのであります。

ここで曾我量深先生の清沢満之観について今少しく紹介したいと思います。曾我先生が明治四十一年六月『精神界』に発表された「我に影向したまへる先師（清沢先生）」という文章があります。満之滅後五年のものであります。

「我等は法然聖人の如き曠世の宗教的天才を有することを光栄となすと共に、又専ら現実界に親教師源空に依りて他力大道に入り給ひたる凡人親鸞聖人を有すことを一層深く感謝するものである。而して我々は幸に親鸞聖人の遺弟として、幼少の時より常にその遺訓たる漢文和文の聖教を拝読するの榮譽を負ふものである。されどされど、悲

むべし我は極愚の凡夫であった。不幸にして七百年前の聖者の教説は、専ら物質界に迷執しつつある我等の俚耳には入らぬのであった。然るに云何なる宿縁にや、我か尽十方の如来は遙に聖子清沢先生を降して我等の親教和上として下されたのである。嗚呼宿善は茲に開發して善知識に遭ひ奉った……我等の先師に於けるは、正に親鸞聖人の法然上人に於けるに等しと信ずるのであります」

又いわく

「若し清沢先生がなかりせば、今や他力真宗は全く教育ある人士の一顧をすら得ないやうになりたかも知れぬと思ふ。絶対他力の大道に付て我々が今確固たる信念を有するは一に先生の鴻恩である。我等が兎に角真面目に、信仰問題に心掛くるやうになりたは、一に先生の御恩である。我等が此の物質万能の世の中、積極主義に狂奔する世の中に、兎に角、精神主義、消極主義に満足せんと求むることは、偏に先師の御教訓である。世の人が信念問題と学理問題とを混同し、宗教と倫理道德とを混乱して煩悶して居るに際し、我々は超然として絶対信念の領域に満足し世人が社会の改良に絶叫しつつあるに当りて、我等は専ら自己救済の光栄を感謝し、讃仰の生活を営みつつあるは何たる幸福ぞや。一に皆我先生を通して下されたる大悲如来の賜物と信じます云々」

と告白されています。只今私どもは曾我先生の御存命中にお許しを得て曾我量深選集十二巻を編集し、現在第八巻まで刊行されてきましたが、その資料集めのなかに、先生の三十六歳から四十一歳まで、一時東京を離れて越後の自坊浄恩寺にありて書綴られていたノートの断片が発見され、そのなかに清沢先生について、こう記しています。

「清沢師が教えられた大方針は如何。先生は何等の結論を与えられなかった。唯第一歩の方針を与えられた。第一はその研究の根本的なことです。何等の教権、何等の憶説や仮定を離れて、直ちに大道の攻究に向うことである。先生の研究方法は正に印度の龍樹論師に比すべきである。第二は実際的である。第三は自由的である。先生の精神主義、内観主義、消極主義は純乎たる實際主義である。先生は未完成品であった。大器晩成となる絶大なる器は永

久の未成品でなければならぬ云々」

と走り書きされているのであるが、思うにそれは曾我先生ご自身の学道の姿勢でもあったことが思われてなりません。

三

この郷里越後の自坊にありて、深く自己内観の道に沈潜された六年間は、先生の生涯にとって重大な意義をもつものではないかと思われます。その頃のものと私に想起されますのは、大正二年七月の『精神界』に発表された「地上の救主」と題する論文であります。それには「法蔵菩薩出現の意義」というサブタイトルがつけられています。先生の三十八歳のときの筆であります。その論文の劈頭に

「私は昨年（大正元年）七月上旬、高田の金子君の所において『如来は我なり』の一句を感得し、次で八月下旬加賀の暁鳥君の所に於て『如来我となりて我を救ひ給ふ』の一句を廻向していたゞいた。遂に十月頃『如来我となる』は法蔵菩薩降誕のことなり」と云ふことに気付かせてもらいました」

と筆を起され、その文章中に

「法蔵菩薩は決して史上の人として出現し給ひたのではない。彼は直接に我々人間の心想中に誕生し給ひたのである。十方衆生の御呼声は高き浄光の世界より来たのではなく、又一定の人格より客観的に叫ばれたのではない。彼の御声は各人の苦悩の闇黒の胸裡より起った。法蔵菩薩の本願を生死大海の船筏と云ふは、御呼声が我が胸底、我が脚下より起りしことを示すものである。世の一切の理想的宗教が『天の宗教』なるに對して、我法蔵菩薩の救済の宗教のみは唯一の『地の宗教』であらせらるる。『光の宗教』は教多い。『船の宗教』は唯我真宗ばかりである。我真宗のみ現実の宗教、眞の救済である。平生業成といひ真俗二諦といふは唯此現実の救済を表明する文字に過ぎぬ」

といい

「畢竟するに光明の憧憬は一切宗教の共通性であって、他力宗教の特色ではない。我々は真に自己にかえる時、讚光の宗教より乗船の宗教に転せねばならぬ。現前脚下の事実に醒めて、自己を生死海底に発見する時、驚くべし自己はその時船上の人である。自己は船客にして又船と船主と無碍一体なるに驚くであろう。一念茲に醒むる時、我は始めて静に天上の慧日を讚仰すれば、我亦光明中の一人に驚く、現実生死の苦海亦理想の光に照されて無限の光海ではないか。我々は夢の如き讚光者たるべきではない」

と説き、かくて「法蔵菩薩とは帰命の信念の主体である」と述べられてくるのであります。『無量寿経』の阿弥陀仏の因位、法蔵菩薩の御物語りを深く問うことにより、その神話性を脱脚して他力信仰の根源的の主体として解明されているのであります。こうして深い先生の信仰体験が更に学問的に自覚的に深く掘り下げられて『無量寿経』の本願の真理をその長い生涯を通して、現代文明の混迷せる無宗教時代のわれわれに開顯下さったのであります。

丁度その大正二年頃でありました。浩浩洞の中心の位置にあった晁鳥敏師は愛妻の死別によって絶望の淵に突き落され「かくして私は凋落して行くか」の筆をとられているのであります。

「私が先生の御在世の間から、特にその後になってだん／＼と感激的に仏陀を崇拜し、現在の境遇より慈悲の存在を説明しようとした私の仏陀は、妻の死と共に、いやおうでも私の心から消えねばならぬやうになりました。自分は罪深い者であるが、この罪の深い私をこのまま抱き取って下さるといふ都合のよい仏陀の恩寵は私から消えたのであります。――妻の死とともに客観的に顯現すると思うた仏陀、丁度キリスト教徒のゴッドといふてをるやうな超絶的の仏陀はないのであるとわかりました。さうして後の私の情慾の発動によりて、私が今日まで自分の主観の上に存在すると思うてゐた道徳的守護神のやうな仏陀は、私をしてかかる行ひをなさしめて止める力さへないのであることがわかった。罪といふならば罪があるばかりであって救ひは別にないものである。かくて主観の上の仏も客観の上の仏も私には何もないのであって、今日まで只古人の言語や自分の思想や感情であるやうに感じたりして

いたに過ぎないことがわかってまゐりました。廃れんとしてをる仏教を己れによって与るべくといふやうな憍慢心にみちてゐた私は、この破壊によりて仏教も滅びん、世の光も消えん。すべてが葬られたやうに思ひました。祈るべきあてもなく、すがるべき所もなくなつてしまひました云々」

と、当時の苦惱を亡き先師清沢満之に訴えていたのであります。一方多田鼎師は千葉教院の長年の伝道生活を閉ぢて、妻子を伴ひ、郷里三河の自坊にもどりしもの深刻なる人情の葛藤に苦しめられ、人間の闇愚に泣き、伝道者としての自負も崩れ去つた如くでありました。やがて大正三年にいたりて「私は此の如く動転せり」を發表、更に「願くは我が昨非を語らしめよ」の筆をとつて、遂に師の清沢満之の道とも別れて「浩々洞」から独り離れ去つていたのであります。そして佐々木月樵師は真宗大学の京都移設後、大正元年九月には教授に就任して京都へ去つたのであります。浩々洞同人の一人であり、『清沢先生信仰座談』の著者である安藤州一師は、当時の満之直門の三人を批評して「佐々木はそんなに苦悶する姿は見えぬ、煩惱即菩提の一乗教学を学んで道徳生活は極めて常識的で、晁鳥の大胆なく、多田の深酷なく、私はただ善悪を別けて行きたいといふ程度であつた」と語り、晁鳥の凋落、多田の動転までの二人の思想信仰は、ともに恩寵主義ということで特徴づけられています。そしてこの二人の恩寵主義を批判して「晁鳥は大胆に一元論に直進する。『精神主義と性情』の一文は君の一元論を最も表明している。多田は天性の道徳主義、どこまでも善悪を区別する二元論であつた」といい、二人の恩寵主義に一元論的と二元論的との相違を見ているのであります。晁鳥師の場合は当時の自然主義的な思潮の影響を強くうけ、人間の赤裸々な真実の姿として本能的獸性を大胆に直視し、煩惱のままに如来の恩寵を欲び、多田師は性来倫理的な性格であり、つねに人間理性の相剋に悩み、罪障の深きに苦惱して、そこにそそがれる如来大悲の恩寵を讚えたのであります。謂わば罪業深重の身ながら、煩惱にも拘らず、却つてそこに如来の恩寵を仰いでいたのであると安藤州一師は批評するのであります。今やかつて浩々洞を背負うていた三人であるが、佐々木師は京都の大谷大学へ去り、多田氏は動転以後は遠く浩々洞から離れ去り

暁鳥師がかくも挫折したとなれば、浩々洞はここに崩壊の危機に直面したのであります。正しく洞瓦解のこの時、郷里越後にありて深く思索に沈潜して「地上の救主」をはじめ多くの論稿を発表していた曾我量深師の存在こそ、この洞の崩壊を大地から支える思想的支柱となっていたように思われてなりません。

すでに浩々洞を解散し『精神界』をも廃刊することに決定して、すでに廃刊の辞も佐々木月樵師の手もとで起草されていたのであるが、当時越後高田にありて専心仏典の研鑽をしていた金子大栄師に請うて『精神界』の編輯を依頼することになったのであります。金子大栄師の東上したのは大正四年四月であります。翌五年九月には金子師も大谷大学教授に就任して京都へ去られたのであります。ここで同年十月に曾我量深師に再度の出郷を乞うて洞の運営に当ることになりましたが、洞の運営もその後容易ではなく、大正六年に入って浩々洞の名も消え、やがて雑誌『精神界』も大正七年に入って遂に消滅することになったのであります。しかし洞の名は消え、同人も一人一人別れて東京に、京都に、金沢にと地方の各地にありて個性ある独立者として、各々安立の己証を發揮して、先師清沢満之の絶対他力の大道を宣布し、広く日本の教界に清新なる信仰の生命を覚醒して今日に至っているのであります。その後の暁鳥師は『甦生の前後』『独立者の宣言』『前進する者』の三部作を刊行し、この暁鳥師を中心にした加賀の高光大船・藤原鉄乗師の信一つに徹した伝道教化は特に目立っています。佐々木月樵師は清沢満之・南条文雄師のあとをうけて大谷大学三代目の学長となり、学長の現職のまま早く世を去られたが、師の功績として禅学の鈴木大拙先生は大谷大学教授として迎えられ、英文雑誌『イースタン・ブッディスト』を刊行、又京都帝大の西田幾多郎先生を講師に請うて哲学を講ぜられしことは、先師清沢満之の哲学を愛好されし伝統を承けて、特に哲学の学問を尊重されし所以が知られるのであります。この佐々木師の門よりは東京在任の印度学仏教学会長の宮本正尊師、京都の文化功芳章の仏教学者山口益教授が生まれています。また曾我量深先生には影と形のそうように生涯の友として金子大栄先生が離れません。かつて多田鼎師は四十歳を迎えた清沢満之が、これよりは『御本書』（教行信証）と『六要鈔』を坐右か

らは離すまいと語られたということを伝えていますが、親鸞の『教行信証』の講讃はまさしく曾我量深・金子大栄の両師に受け継がれ、この両師によりてその教学面における大成が果されたものと申して過言でなからうと思われるのであります。かくて真宗の教学は明治の清沢満之により西欧の近代哲学思想との対決をくぐって、徳川時代の閉鎖的な宗学を根本的に革新して、仏教本来の面目にかえし、潑刺たる心霊の自覚に立ちて、物質文明に病める現代人の苦悩救済への通路を開き、而してその要望に応答する親鸞教学はこの度亡くなられました曾我量深先生の深遠なる体験と強靱なる思索によって、その九十六年の生涯をかけて果遂されていったことでもあります。昭和三十八年六月六日、清沢満之生誕百年の記念講演会が大谷大学に於て催されましたとき、たまたま曾我量深先生の大谷大学学長の在任中でありました。鈴木大拙先生の「清沢満之は生きている」のご講演をうけて、曾我先生は、ただいま鈴木先生は「清沢満之は生きている」と仰せになりましたが、清沢先生はどこに生きておられるかと問う人があるならば、私は「清沢先生は本能の世界に生きておられる」といおうと思うと語られました。清沢満之と曾我量深とは靈的に一人格として目前に活動していることが思われませんでした。